君は初めて捕まえたポケモンを覚えているか？

がんばリーリエ

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
キミは初めて捕まえたポケモンを覚えているか？
俺は覚えてない。

これは赤い帽子の人の電気ねずみに全タテされた主人公が、必ずリベンジすると誓い
なんやかんやでライバルキャラと絡み
なんやかんやで本来負けるライバルキャラを勝たせたり
なんやかんやでチャンピオンを目指すお話

目次

ホウエン地方
君は初めて捕まえたポケモンを覚えているか？ ―――― 1
ポケモンバトル ―――― 14
ポケモンで点字ってどうなの？ 28
私達は強くなってるのかな ―――― 35
殺すわよ？ ―――― 43
ハナダの洞窟 ―――― 50

ホウエン地方
君は初めて捕まえたポケモンを覚えているか？

自分が初めて捕まえたポケモンを覚えているか？
因みに俺は覚えていない。
最初に貰ったポケモンはゼニガメだったと記憶してはいるが、最初に捕まえたポケモンは？と聞かれると首を傾げてしまう。
コラッタだったか、ポッポだったか。
もしかしたらキャタピーだったかも知れない。
俺にとってポケモンはゲームで、それこそガキの頃はアホみたいにやっていてチャンピオンのギャラドスのはかいこうせんに目を輝かせたり、ずっと手持ちにいたゲンガーがＬｖ１００になり最強のポケモンだと疑っていなかった。
沢山ポケモンを捕まえてかっこいいポケモンや強いポケモンが手持ちに残って、ポケモンのレギュラーは頻繁に入れ替わり、入れ替えたポケモンは永遠にボックスの中。
ゲームなのだからポケモンごとに能力値があって覚える技に特性、勝てるポケモン強

いポケモンが手持ちに残るのは必然であって当たり前だ。
どれだけＬｖを上げたとしても上がる能力値には限界があり、種族値と呼ばれるポケモンごとに設定された限界値を超えることはない。
ゲーム内最強トレーナーであるレッドの相棒たるピカチュウが最もたる例で、Ｌｖ８５という敵トレーナーとしては１番高いＬｖで設定されているピカチュウだがその種族値は大した事は無い。
なんならここで２確されなければ、積みの起点となり明らかなレッドの弱点となっている。
最強という位置づけのレッドの相棒でそれなのだ、だからこそ種族値が低いポケモンの起用率というのはかなり低い。
もう一度聞こう。
君は捕まえたコラッタを四天王戦で使っただろうか?
君は捕まえた最初のポケモンを覚えているだろうか?
因みに俺は覚えていない。

俺には前世の記憶がある。
いや待ってほしい。
そんな痛いヤツを見る目を向けるのはやめて欲しい。
何言ってんだこいつと思うかもしれない。
だがこれは紛れもない事実で、俺はこのポケモンというものを確かにゲームでプレイをした事がある。
それを認識したのは俺が6歳ぐらいのころで我ながらテンションが上がり過ぎて、母さんと父さんは目を丸くしていた。
すぐ様ポケモンが欲しいと駄々を捏ね親を困らせ、チャンピオンになるんだと息巻いていた。
自分が実際なれると疑っていなかったし、ゲームの中でもチャンピオンになるのは寧ろ通過地点でしかなく技構成はフルアタックでもＬｖにものを言わせれば特に難しいものでもなかった。

それが間違いと気が付いたのはすぐだった。
当たり前だ、命中率１００％な技?
抜群の技だけ使ってればいい?
とんでもない!
これはゲームではなく現実なんだ。
相手は棒立ちなわけがなく、動くのだから命中率１００％だろうが必中技であろうが回避してくる。
ゲームというよりも、アニメに殆ど近しいと言っていい。
最後まで何が起こるか分からない、それがポケモンバトルなのだと俺は1番最初のジムへの挑戦で思い知った。
ニビジムのタケシ。
初期のゲームではイシツブテとイワークというポケモンを使ってくる。
防御の種族値が高く打たれ強いポケモン達なのだがタイプ故に草や水といったタイプに4倍を付かれ、更に特防と呼ばれるもう1つの防御に関する能力値は大したことがなくそのせいで簡単に突破が出来る。

だから俺は舐めていた。
通過点としてしかタケシを認識していなかった。
まぁものの見事に惨敗したのだが。
それから俺は認識を改めて、ポケモンバトルという競技に熱中していった。
技を磨き、ポケモンを鍛えて、トレーナーである俺は駆け引きを徹底して研究した。
気が付けば俺はジムバッチを８つ手に入れていた。
手に入れた自信に、ここまで戦い抜いてきた相棒のポケモン達。
傲慢もなければ油断もしない、もう相性のいい攻撃技だけしていればいいと思っていた俺は存在しない。
戦い傷付き、どんなピンチだって相棒のポケモン達と乗り越えて来た俺には確かに積み上げてきた自信と誇りがあった。
だからだろうか。
俺はただただ信じられなかった。
そんな俺の自慢のポケモンが種族値３００程度のピカチュウに全抜きをされるだなんて。
深く赤い帽子を被り表情が全く読めないソイツは。
この世界で最強と言われるトレーナーで。

今でも忘れられない。
あの敗れた瞬間を。
あの目の前がまっくらになる感覚を。
絶対に忘れない。
興味無さげに去っていくヤツの後ろ姿を。

「っ!?……　う、うう」
負けた、惨敗だった。

もちろん簡単に勝てるとは思っていなかったけれど、ぐうのねも出ない程の惨敗だった。

負けて負けて負けて、今度こそはと挑んだポケモンバトル。

あの時、初めて戦ったあの時は悔しいというよりもびっくりした、という感情が大きかった。

隣に越してきたユウキくん。

お父さんのお手伝いでポケモンと長く一緒にいる私を、貰ったばかりのポケモンで倒し喜ぶ姿は憎たらしいぐらい笑顔で、何となく私も初めはそうだったよなと感じたぐらい。

ユウキくんが旅に出て、私は色々なポケモンを見つけるために旅に出て、出逢えばポケモンバトルをして。

その度に彼は物凄いスピードで強くなっていく。

さっきのミナモシティでのバトルで、相性がいいはずのジュカインにワカシャモが倒された時にぼんやりと「あぁ、これは勝てない」と思ってしまった自分がいる。

「ごめんね、ごめんね……」

初めて悔しいって思った。

私の方が先輩なんだぞって言ってやりたかった。

頑張って特訓だってしたのに私が勝手に諦めて、結果このザマだ。
オオスバメが申し訳なさそうに此方を見ている。
違う、違うの。
私には才能がないから、バトルの途中で諦めてしまうような最低なトレーナーだから。
咄嗟に家に帰るって告げたのは、多分私には色々と才能がないからって自覚して諦めたから。
ずっと周りからは才能があるって期待されていて、私自身ポケモンバトルには興味はなかったけれどユウキくんが来て少し変わった。
先輩面しようとして失敗して、諦めが悪く何度も戦いを挑んで返り討ちにされてこうして情けない姿を晒している。
私の方がずっとポケモンと一緒にいたのに。
ユウキくんにはあって私にはないもの、きっとそれは。
「私には才能がない……」
「わかるわぁ……」
「……　ふぇ?」

気が付けば後ろに誰かがいる。
気だるそうな目に猫背、灰色の髪はぴょんっと横に跳ねている。
知らない男の人だ。
私は泣かれていたのを見られた恥ずかしさと、情けない言葉を聞かれた恥ずかしさでさっと身体を引いてしまう。
「あー、悪い。別に盗み見るつもりはなかったんだ。ちょっと気になる事があったから釣りをしてただけで」
そういう彼の手にはボロのつりざおが。
でも此処には特に珍しいポケモンがいるわけじゃないんだけど。
「ん、俺が探してるのはヒンバスだよ」
「ヒンバスですか?」
「あぁ。釣れて欲しい時に全然釣れなくて、どうでもいい時に釣れまくるあのヒンバスだ。まぁそんなの今はどうでもいいか」
私の目線がつりざおにいっていたのを察して彼はそう言う。
それはいいんだと話を切り上げ、彼は続けて言った。
「さては君、ポケモンバトルで負けたな?」
「……　はい」

私は負けた時の事を思い出す。
倒されるポケモン達の姿、そして諦めて指示が上手く出せない私に戸惑うポケモンの姿。
「通りすがりの俺が言うのもなんだけど、確かにポケモンバトルに才能は大事だ。色々なトレーナーを見てきたが才能のあるトレーナーってのはバトルになるとやべぇ、まるで何をやっても上手くいかねぇんじゃないかって思うよな。ほんと化け物だよ」
分かる気がする。
何をやってもダメな気がして、気が付けば私のポケモンは倒れている。
いつもそうだった。
こっちの指示した事なんてお構いなしに、時には回避し、時には強引に押し切り、時にはそれを利用される。
私では考えられないような事を容易くやってくるんだ。
それを指示するユウキくんも凄いけれど、その指示を躊躇わず忠実にこなしてしまうポケモンも凄い。
その度に感じる彼の才能。
そして可能性。
「心当たりがあるみたいだな。才能っていっても色々ある。天性の感で指示がやべぇや

つ、育成がプロで潜在能力を引き出すやつだったり様々だ。しかも本人は無意識だしただ真っ直ぐにポケモンと向き合うから本当に強い」

何となく分かる気がする。

ユウキくんはいつも全力で真っ直ぐで、ポケモンもとっても信頼している。

そう思うとやっぱり私なんかがユウキくんに……

「勝てるわけない、そう思うか？」

「うっ……」

「そんな顔してたわ、まぁ分からんでもない。俺も1回諦めた、完膚なきまでにやられてプライドなんて粉々。でもな」

そう言って彼は私を指差し、そして横のオオスバメを指差した。

「お前のポケモンは諦めてねぇみたいだぞ」

「えっ？」

横を見るとオオスバメと目が合う。

私が旅に出て直ぐに捕まえたポケモンで、スバメだった頃からお世話になっている。

力強いオオスバメの瞳は真っ直ぐ私を貫く。

「あっ……」

「きっと他のポケモンもそうだ。絶対諦めてない。なにも悔しいのはお前だけじゃな

い、ポケモンだってそうなんだよ。なんだったらお前より悔しい筈だ、実際に戦ってるのはポケモンだし自分が負けたからお前がそうなってんだからな。何も1人で戦ってる訳じゃないってのは覚えといてやれ」

やっと気が付いたか、と言いたげに目線を逸らし「スバ」と小さく鳴くオオスバメ。

そっか、そうだよね。

悔しいのは私だけじゃない。

寧ろポケモン達の方が悔しいに決まっている。

そんな私のポケモンが諦めてないんだからこんな所でくよくよしてる場合じゃない!

「ま、そんな顔が出来るならもう大丈夫だろ。悪かったな突然、じゃあな」

「ま、待って!」

何処かに行こうとする彼を私は咄嗟に引き止める。

お礼をしたい。

とても大切な事を教えてくれたんだ、でもどうすればいいのかわからない私は呼び止めたのは良いものの何も考えていない。

通称ノープランだ。

どうしようどうしようと考えた末に出て来たのは。

「わ、私とポケモンバトルして下さい！」

ポケモンバトル

何故か主人公のライバルとポケモンバトルをする事になった件について。
色々な地方を回り、俺もベテランと言って差し支えないぐらいになり訪れたのはホウエン地方。
故郷であるカントーを出て、シンオウ、ジョウト、カロス、アローラ、イッシュと回り今はホウエンにいる。
ガラル地方ってのもあるらしいが俺はその地方の事を知らないので後回しにしている。
俺にとって思い出深いホウエン地方。
なんだったら1番多くプレイしたシリーズかも知れない。
俺はジムに挑戦しつつ、ヒンバスを釣ろうと唐突に思い当たり１１９番道路に訪れた。
俺はある目的を胸に旅をしている。

まぁ武者修行のようなものなのだが思い出巡りというか、やはり前世の記憶で知っていたり思い出深い場所はどうしても懐かしくなってしまい観光気分になってしまう。

１１９番道路もそうで、ヒンバスを釣ろうとしてヒンバスに出会うまでに色違いのコイキングに出会ったりと俺にとって思い出の深い地だ。

俺はヒンバスを釣り上げようとボロのつりざお片手に歩いていると、見覚えのある後ろ姿を見掛けた。

うん、どう見ても主人公かライバルのハルカだな。

これまでに主要人物や主人公に出会う事は多々あって動揺こそはなかったのだが、どうも様子がおかしい。

何処か困ったようなオオスバメに蹲るハルカ。

オオスバメって事はライバルの時のハルカなのか？

主人公であるときにオオスバメを持っていない確証はないが、ライバルの先発と言えばオオスバメという印象が強いのも事実。

正直ルビーサファイアのライバルは弱い。

最後のポケモンバトルとなるミナモシティでも彼、彼女の手持ちの御三家は最終進化ではないと言えばその残念さが分かるだろうか。

まぁ最初にミズゴロウを選んでるとヌマクローに進化して、相手のキモリもジュプト

ルになっている最初の戦闘は割とキツイんだけどね。
でもルビーサファイアのライバルはジムバッジを集めてる気配は無かったし、チャンピオンリーグにも興味が無さげだったのを考えると妥当なのかも知れない。
この辺りはひみつ基地に出来る場所も多いし、それ関係かなぁとその場を去ろうとした時。
でも俺は見てしまった、聞いてしまった。
良く見たことのある顔だった。
なんだったら俺も良くしていた顔だ。
ポケモンバトルに負けて、悔しくて悔しくて堪らない。
そんなポケモントレーナーであるならば誰だってした事のある顔。
そう言えば気になっていた事がある。
ミナモシティでライバルに勝つとライバルは、少し無言になった後一区切り着いたからと家に帰ると言うのだ。
当時から俺はそこに違和感を感じていた。
きっとあれは悔しくて悔しくて、でも主人公との差に気が付いて俺なんか、私なんかって思ったのではないか。
だから旅を1度止めよう、そう思ったのではないか？

そこから先もライバルは伝説ポケモンを止める所に現れるがその時も何だか自分との差というものを感じていたような気がする。
チャンピオン戦に勝った後もそうだ。
きっと彼、彼女にも知られざる葛藤があったのだろう。
ゲームではそれは語られていない。
でもこれはゲームに似ていてゲームではなく、現実だ。
だから俺は彼女の呟きに反応してしまったのかも知れない。
あのいけ好かない赤い帽子の野郎にやられた時の俺と同じ、諦めたような顔をしている彼女に。

そして今俺はそんなライバル、ハルカちゃんとポケモンバトルをしようとしていた。
いやどうしてこうなった。

「ほ、ほんとにやるのか？」
「はいっ！お願いします！」

と言っても相手さんはやる気満々である。

偉そうに言った手前断りにくいのも事実だった。
だが恐らくミナモシティで主人公に敗れた後であると考えると、ハルカちゃんの手持ちは良くて３０Ｌｖ程度
エースである御三家も最終進化ではないはずだ。
こう見えて長く旅を続けている俺のポケモンのＬｖは……
「あー……　今からヒンバス釣ってそのヒンバスでポケモンバトルしたらダメか？」
「ダメに決まってますよ！幾ら何でも舐め過ぎです！」
「だよなぁ……　でも俺こう見えてポケモンのＬｖだけは高いから多分全タテするぞ？」
別にハルカちゃんを舐めているわけじゃない。
でもこれは紛れもない事実だ。
それでもやると聞かないハルカちゃんに俺は折れ、最終的に俺が手持ち１匹でハルカちゃんは手持ち全てを使う変則マッチで行う事になった。
少し不満そうにしていたが、１番付き合いの長いポケモンを出すからと嫌々ながら了承。

「じゃあ、行きます！行っておいで、オオスバメ！」
「魅せてやれ、バタフリー！」

ハルカちゃんはやっぱり先発にオオスバメか。
対する俺はタイプ相性が宜しくないバタフリー。
だが別に慢心をしているわけじゃない。
バタフリーは俺が1番最初に捕まえたポケモンだ。
ずっと、ずっと一緒で楽しい事も苦しかった事も共に過ごしてきた正真正銘俺のパートナー。
バタフリーは正直強いポケモンではない。
ピカチュウよりも種族値は高いがそれでも４００には届かない。
言われた事がある。
「そんなポケモンまだ使っているのか？」と。
そんな事は俺が1番分かっている。
誰だってバトルに勝つ為に強いポケモンを使う。
いわゆる６００族と言われるポケモンの中でも最強クラスのポケモン達を。
確かにそういうポケモンは強い。

ゲームをしていた時であればバタフリーを使っていたとしても、序盤だけでいずれ入れ替えていただろう。
でもこれはゲームじゃない。
ポケモンの数だけ出会いがあって、ストーリーがある。
そうやって出会ったのが今のバタフリーで、当時のキャタピーだ。

「オオスバメ、つばめがえし!」
気合十分、上空から勢いを付けてオオスバメがバタフリーに向かって飛んでくる。
つばめがえしは本来必中の技だ。
もちろん此方では必中とまではいかないが、非常に回避しづらい技ではある。
なるほど流石はライバルのポケモン、非常にいい加速だ。
「バタフリー」
言葉はそれだけで充分だ。
「よし、きま……　嘘っ!」
勢い良くバタフリーに突っ込んだオオスバメ。
しかし当たる寸前でオオスバメは吹き飛ばされてしまった。

別に難しい事ではない。
当たる寸前でエアスラッシュをぶつけただけ、と聞えはいいが本来指示が間に合わない場面でこの様な事が出来るのは、ポケモンがトレーナーの指示をされる前にどう動くかを予め感じ取っている必要がある。
一朝一夕で出来る事ではないのだ。
「くっ!?オオスバメ、かげぶんしん……　オオスバメ?どうしたの!?」
空中で体勢を立て直し、ハルカちゃんにの指示に従おうとしたオオスバメだが突然動きが止まる。
「まさか……」
「そのまさかだよ。オオスバメはまひしている」
「嘘……　一体いつの間に」
「簡単だよ。本来ポケモンバトルは最初に登録した４つの技しか使えないが別に他の技が使えない訳じゃないの知っているだろ?けどバタフリーの強みってのは多彩な粉技にある。だからエアスラッシュに俺は粉の効果を付けるように特訓したのさ」
この辺はゲームとは同じだが使えないことがない事を知った俺はバタフリーの強みを生かす為に、主力であるエアスラッシュに粉の効果を付けれるように特訓をした。
こうすれば粉で技枠を消費せずとも相手を異常状態にする事が出来る。

そのまま動きが鈍った所をエアスラッシュで仕留め、オオスバメは戦闘不能。
ハルカちゃんの次のポケモンは。
「お願い、キノガッサ！」
やはりキノガッサか。
しかし俺のバタフリーはキノガッサ相手に４倍弱点を突ける。
さぁ、ハルカちゃんはどうするのかな？
「キノガッサ、まずはキノコのほうしを辺りに振り撒いて！」
「なるほどな。けど甘い、既に俺のバタフリーは２回積んでいる。決めろバタフリー」
まるで霧隠れのようにキノコのほうしをばら撒くキノガッサ。
確かに良い手だが、悪手だな。
先程よりもかなり威力のあるエアスラッシュが地面を削りとる勢いで、キノコのほうしを吹き飛ばしそのままキノガッサは戦闘不能。
「今のがエアスラッシュ？でも威力が……」
「あぁ、俺のバタフリーはちょうのまいを動くだけで積めるからな。時間を掛ければ掛けるほど速くなり技の威力も上がるぞ」
これも常時積めるように訓練をした。
ちょうのまいは積み技としてかなり優秀だが、正直ポケモンバトルのレベルが高く

なっていくと積み技なんて使う暇なんてない。
だからこそ動くだけで積めるようにする必要があった。
種族値で負けている事が前提になる戦いで積み技がないとなると、勝つ事が非常に難しくなってしまう。
充分に積んだバタフリー相手に次に出て来たホエルオーは何も出来ず戦闘不能。
「頑張って、ワカシャモ！」
来たか、ハルカちゃんの相棒。
出て来たのはワカシャモ。
ならば主人公であるユウキの御三家はキモリを選んだという事になる。

「正直、ここまでだなんて思いませんでした」
「俺も目指す場所がはるか彼方だからさ、必死なんだ。だから負けるつもりは無い」
「私も……　諦めません！」

諦めればいいのに、とは思わない。
これはゲームではない。
ゲームであるのならば確かに多くのものが降参している場面だとは思う。

けどこれは現実だ。
そして何よりもポケモンバトルだ。

「バタフリー、エアスラだ」
「ワカシャモっ！」
ハルカちゃんが叫ぶ。
多分無我夢中なんだと思う。
バタフリーを見る、ポケモンバトルは相手が調子付き勢いに乗りポケモンとトレーナーが通じあった時が1番怖いのは経験で何度も体験している。
だからこそバタフリーを見る。
此方を一瞬見てから、バタフリーはエアスラッシュの体勢に入った。
「ワカシャモっ!?」
何も直線的な攻撃が全てじゃない。
ここまで積んだバタフリーであるならば、薙ぎ払うように、それこそかぜおこしのようにエアスラッシュを広範囲に放ったとしてもとてつもない威力が出る。
これには堪らずワカシャモは吹き飛ばされる。
しかし震えながらも立ち上がる。

それを耐えるか。
時にポケモンは限界を超える、それはいつもトレーナーが諦めずポケモンも負けたくないと強く思っている時。
ワカシャモが吠える。
その時、ワカシャモの全身が光り輝いて。
「ワカシャモ……　いやバシャーモ！」
「バシャっ！」
「ここで進化するかっ!?」
ワカシャモがバシャーモに進化する。
このタイミングで進化するなんて、ハルカちゃん意外と持ってるな。
「バシャーモ！スカイアッパー！」
「バタフリー！」
あのバシャーモほんとに進化したばかりなのか疑いたくなるような、凄まじい勢いで飛び上がる。
恐らくここまでになるとエアスラッシュでは止められない、サイコキネシスで止めてもいいのだがこうなると何をしてくるか分からない為1度無難に回避した方が良さそうだ。

バタフリーが上へ飛ぶ、これでバシャーモの攻撃は届かない。
「バシャーモ！お願い！」
空中で止まるかと思われたバシャーモの足が燃え始め爆発する。
そしてその勢いで加速して一気にバタフリーの元へ。
そこでそうして来るか！
こうやって予想外の事が起こった時が1番ポケモンバトルで盛り上がる、でも俺たちは負けねぇぞ！
「バシャーモ、ブレイズキック！」
「バタフリー！迎え撃て！」
マジで？
みたいな顔すんなバタフリー。
分かってる、お前ならまだこれぐらい回避するなり出来るって。
でもここまでされて迎え撃たないのはポケモントレーナーが廃るってもんよ！
バシャーモのブレイズキックがバタフリーに命中する。
「よしっ！……　バシャーモ!?」
「ごめんなハルカちゃん。俺のバタフリーのりんぷんに粉の効果があってだな」
「ま、またなのっ！うぅ、この鬼畜！」

「ふっ、最大の褒め言葉だな！」

やっぱりまひってバグなんだなって。

異常状態になった隙を見逃さず仕留めバシャーモは戦闘不能。

これで俺の勝ちだ。

ポケモンで点字ってどうなの?

レジロック　レジアイス　レジスチルというポケモンをご存知だろうか。
俺は点字ポケモンと呼んでいるが、ゲームしていた当時いきなり点字が出てくるもんだから「点字とか分かるわけねぇだろ!」とゲームに向かってつっこんでいた記憶がある。
読んだら読んだで、何分もじっとさせられたりそらをとぶを洞窟内でさせられたりと正直そんなんする必要あった?と言わざるをえないイベントだった気がする。
てっきり俺は次回作の伏線でも書いてあるのかなって思ってたんだが、そういう事も一切なかった。
まぁエンテイ　ライコウ　スイクンみたいに逃げたりしないだけマシなのかもしれないが。
「ヒセキさん、これなんて書いてあるんですか?」
「右に2歩、下に2歩のところでかいりきって書いてあるな」

「ほへー、こんな文字が読めるなんてヒセキさん凄いですね！」
そして何故かハルカちゃんが付いてきている。
あのポケモンバトルが終わった後に、別れるつもりであったのだが今もこうして付いてきている。
理由はそうだな。
「で、そろそろ考え直してくれましたか？」
「……　まだそれ続いてるのか？」
「当たり前じゃないですか！私を弟子にしてくれるまで離れるつもりはありませんから」
こんな感じである。
鬱陶しいまではいかないが、それでも女の子と2人というのは精神衛生上宜しくない。
周りからの目も少々痛いし、どうにか出来ないものかと。
肩に止まっているバタフリーがやれやれ、と言いたげに俺を見ている。
いやお前も俺が目立ってる要因の1つだからな？
この辺りじゃバタフリーは珍しいポケモンだから仕方がないっちゃ仕方がないが。
何せこれからこの自覚のないハルカちゃんは、巻き込まれはしないが伝説ポケモンを

止める為に動く主人公の前に現れ意味深な言葉だけ残して何処かに行くという役目がある。

正直それは割とどうでもいい。

ハルカちゃんが主人公との違いや差に思う所があるような事を匂わせるシーンだが重要なのはそこじゃない。

このままでは何だか主人公等の主要人物に認知されてしまう事が問題なのだ。

一身上の都合で特に四天王関係の方々とはお近付きになりたくないというのもあるが、ある事情で面倒臭い事になるのが分かり切っているのでどうしても会いたくない。

ジムを荒らした後なので、俺がホウエンに来ているのはバレている。

このままハルカちゃんと一緒にいると絶対バレる、そしてそのまま拉致られる。

「どうしたんですか?」

「い、いや何でもないんだ」

う、悪寒がしてきた……

取り敢えずレジロック達は捕獲されていない事が確認出来た。

殆どの場合が伝説や幻、準伝説と呼ばれるポケモンは存在はしているが捕まえられる

という事はない。
これまで色々な地方を回ってきたが殆どのポケモンが野生だった、勿論主人公に捕獲されていたポケモンもいたがホウエン地方のポケモンはまだ捕まえられていないだろう。
もしそれらのポケモンを捕まえる可能性があるとすれば主人公級のトレーナーでなければまず有り得ない。
何故断言できるのかというと、まず伝説ポケモンは異次元に強い。
ゲームではあんな扱いだが良く考えて欲しい。
時を越えたり、大地を作ったり、世界を作ったりするポケモンが弱いと思うだろうか？
そんな天地を揺るがし超常現象を起こすポケモンが弱いはずがなく、まともに対面すればそれこそ俺たち人間の命が危ない。
もちろんポケモンもだがそもそもが、相手が神に等しい力を持っているのだ。
だからこそ主人公のようなトンデモ才能で相手を力でねじ伏せれたり、それこそ伝説ポケモンに気に入られたりしない限り捕獲なんて不可能と言っていい。
「取り敢えず今日は色々回ったからこの辺で今日は休むかぁ」

「……　あの、そろそろポケモンセンターに行きませんか?」
「あー……　俺は野宿でいいからハルカちゃんだけ行ってきたら?」

まぁ行ったら行ったでそのままトンズラするんだけどな!

「むっ、そんな事したらヒセキさん逃げちゃうじゃないですか」
うわ、ばれてーら。
この子なんだかその辺の勘が異様に鋭いんだよなぁ、ちゃっかりバシャーモかオオスバメに俺を見張らせる程度には信頼がない。
「フリ、フリ!」
ばしばし、とバタフリーに羽でしばかれる始末。
「でも何でポケモンセンターに行きたいなんて言い出すんだ?」
「えっとそれは……　です」
純粋に気になった事を聞くと、ハルカちゃんはぷいっと目線を横に逸らしほんのりと頬を朱に染めながらぼそぼそと呟く。
最後の方なんて全く聞き取れない。
「ごめん、もっと大きい声で言ってくれないか?」

「だから……　ぉ……　ろ……　ないし……」
「え、なんだって？」
「だぁかぁらぁ！最近ずっとお風呂入ってないから入りたいのっ！」
「お、おう」
突然大きい声を上げ俺を睨み付けるハルカちゃん。
おいバタフリー、なんだその目は。
お前ご飯抜きな。
確かにそろそろ手持ちの食料も心許ない、でもあと2日は野宿でも行けるとは思うのだが。
ん？あぁ、そういうことか。
俺は立ち上がりハルカちゃんの近くまで歩いて行く、そんな俺を首を傾げて見上げているハルカちゃんの首元にぐいっと顔を近付けた。
「なっ!?」
「すんすん、うん臭くないし寧ろいいにお……」
「バカっ！」

バチン！

と良い音がこだまする。
そして回る世界。
やれやれだぜ、そう言いたげなバタフリーが降りてきてバシッと羽で俺を叩いた。

私達は強くなってるのかな

ハルカちゃんを引き連れてなんやかんやで旅を初めてそれなりの時間が経った。
最近天候が安定しない事から、そろそろルネシティでのカイオーガ　グラードンイベントが始まる頃だろう。
そして肝心のハルカちゃんなのだが、俺がビンタされた後に「責任取って下さい」と男が聞きたくない言葉ベスト3に入る素晴らしい言葉を貰ったので仕方なく弟子入りを認める流れになった。
その時の潤んだ目で俺を見上げるハルカちゃんの姿を見られたのならば、きっと俺はジュンサーさんに連行されていただろう。
誤解されないように言っておくとハルカちゃんは１２歳で、俺もまだ１６ではあるが精神年齢的に色々アウトだと思う。

確かにどこに出しても恥ずかしくない美少女なハルカちゃんではあるが、どうにも若すぎてそういう対象には見れないというのが現状だ。
でもやっぱり女の子なんだなぁって思う仕草であったり、身体の柔らかさであったり、匂いであったり。
底なしに明るく距離感が近いのもほんと勘違いしそうになるから辞めて欲しい。
やはり俺も男なのでどういう場面で魔が差すか分からない、だから常々寝る時などあまり近付かないようにと言ったりしているのだが起きるとぴったりとくっ付いてたりする。
俺はもしかしたら潜在的ロリコンなのかも知れないとショックを受けた事が記憶に新しい。
そしてバタフリーに羽でしばかれる始末。
うるせぇ、お前もメスのバタフリーに媚び売ってただろ。
あ？やんのかコラ。

そんなこんなで今も俺はハルカちゃんと旅をしていた。
そしてやはりと言うべきか、ハルカちゃんの手持ちにピカチュウが加わった。
と言っても既にライチュウに進化しており、優秀な起点として育成をしている最中で

ある。

場合によって特殊アタッカーにもなるので、ライチュウの加入は大きいと言える。

ハルカちゃんは俺の予想を遥かに超える成長を見せている。

何というか流石は主要人物、ライバルキャラだなという感じだ。

正直主人公は確かに恐ろしい才能を持っている。

ゲーム視点でＬｖを上げて物理で殴るだけでチャンピオンになってしまうのだから、その恐ろしさが分かるだろう。

なので主人公はその天性の才能、そして恐ろしい運によって勝ってきている部分がどうしてもある。

これは俺が色々な地方で出会った主人公を見て感じた事で、恐らくホウエン地方の主人公であるユウキも同じだと推測される。

だから初見の方が主人公相手である場合は勝ちやすい。

逆に言うと主人公は負けると馬鹿みたいに強くなる、ゲームでいうレベリングや技構成の見直しをしてくるのだがそれが恐ろしい才能で昇華され凄まじい事になる。

まぁ専門的な知識や理解、勝負勘がなくともチャンピオンになっちまうんだからなほんと主人公補正というのは恐ろしい。

だからまだトレーナー歴が短い今であるのならば勝つのは難しくない。

徹底的にメタってやればいい。
恐らく次回は通じなくなるだろうが、それでも勝ちを拾うことは難しくない。
まぁそこは主人公補正がどこまで働き、主人公がどれだけひらめきを見せてくるかによるが。
何度も言うが、この時点での主人公はトレーナーとして才能は化け物でも知識や理解、経験はひよっこも同然。
だからこそ自分だけに勝つ為に組まれた戦術や、技構成には滅法弱い。
どっしりと構えた最強のチャンピオンよりも、恐らくそちらの方が主人公としては鬼門だろう。

「私達は強くなってるのかな……」
自分の強さっていうのは分かりにくいものだ。
ゲームであればＬｖや能力値を見るだけで直ぐに分かるが、ここではそれが全てではない。
確かに数値が高ければ高いほど有利なのは間違いないがポケモンバトルはそれだけが全てではない。
「行けると思うならどこまでも。

やれると思うならどこまでも。
好きなようにやったらいいじゃないか。限界を決めるのは自分ってことだ」
「それは？」
「これはあるジムリーダーが言っていた言葉だよ。トレーナーとポケモンは一心同体だ、自分を信じてポケモンを信じて、そして今までやって来た事を信じるんだ。気負うことはない、ポケモンバトルなんだから負けたら何度でも挑めばいいんだ」

ぴろりん、ぴろりん。

ポケモンはデータじゃない、ポケモンバトルはゲームじゃない。
そして何よりも信じる心と楽しむ心、諦めない気持ちが大事だとここに来て心底思い知らされた事だ。
「はい、はいっ！私頑張りますっ！」
「おう。頑張れ頑張れ」

ぴろりん、ぴろりん。

「ところでヒセキさん」
「どうした？」
「なんで私たちポロック作ってるんですか？」

んなもん、懐かしくて思わずやりたくなっちゃったからに決まってるだろ！
このスピードアップしていく中で、タイミング良く自分の所でボタンを押すのが音ゲーに通ずるものがあって俺は好きだった。
なので視界に入った瞬間ハルカちゃんを引き連れてポロック作りに熱中してしまったわけだ。

「ふふふっ」
「突然笑いだして、何なんだよ」
「いや、何だかヒセキさんいつも大人びてるのに今は子供みたいだなって。ふふふっ、けどそんなヒセキさんも素敵ですよ？」

ぶっぶー。
盛大にタイミングを逃し押し間違える。

「……」
「あー、おかしい。わぁ、こんなに沢山っ！じゃあ私このポロック持って先に行ってますね！」
「あぁ……」

そう言って笑顔満開、元気ハツラツ手にいっぱいのポロックを持って外に出ていくハルカちゃん。
「フリィ～……」
「うっせ。別に意識して大人ぶってたわけじゃねぇし。子供っぽくもねぇし」
ポロックやってるんだから冷やかすんじゃねぇよ。
やはりパタパタと軽めに羽で叩かれる。
だって仕方がないじゃないか、こんなん誰が見ても駆け出してポロック作り出すわ。
でも悲しいかな褒められると嬉しいって思ってしまうのが男のサガである。
「っ!?あーもー、分かったから暴れんな後で出てきていいから……」
腰に付けたMと書かれたボールがカタカタと揺れ騒がしい。

これから起こるであろうイベントや厄介事を思いため息を吐く。
そんな憂鬱そうな俺とは別に、背中のバタフリーは今も尚ご機嫌そうにポロックを食ってるもんだからボソッとバタフリーに喧嘩を売り「かふんだんご」でボロカスにされるのはいつもの流れだった。
味方に使うと回復するはずなのだが……
まぁそういうことなのだろう。

殺すわよ？

俺はずっと考えていた。
主人公は一体なんの玉を持っていて、どちらの伝説ポケモンと接触するのだろうと。
ようはサファイアなのか、ルビーなのかどっちになるのかということだ。
少なくともジムの前に狂気の伝説ポケモンが２匹争ってないところを見るに、エメラルドではないのは確定している。
……　してるよね？

思うのはルネシティでカイオーガとグラードンぶつかったら街壊滅するだろという所。
そこにレックウザ来るんだから確実に消し飛ぶな。
ここはゲームではない、だからその辺の被害って結構酷かったりするのはカロスで既に体験済みだ。
フレア団には無駄に絡まれるし、アイツが居てくれなければ即死だった。
補正が働くのは主要人物だけで、モブやそれ以外には普通に凄まじい被害が出る。

だから主人公関係の主要人物とはあまりお近づきになりたくない。
特に四天王関係、あとシンオウのチャンピオンとか。
いやまぁ俺がシンオウのチャンピオンに追っかけられてるのはある意味自業自得ではあるのだが……
そんなだから俺はルネシティに一緒にやってきてからずっとそわそわしていたハルカちゃんを送り出し、その辺で隠れてようかなぁと思っていたんだ。

「君がヒセキくんだね？」
「……」

ハルカちゃんを影から伺っていたのだが、肩を叩かれバタフリー邪魔すんなよって振り返ると石が好きそうなイケメンがいた。
いやお前、さっきまであっちいたじゃん！
ちょっとハルカちゃんが心配で近付き過ぎたのが仇となったか。
おい、バタフリーお前気が付いてたんなら教えてくれよ。
え、教えてくれてたって……
なのにお前がハルカちゃんを食い入るように見てるからだって？

み、見てねぇし！

「無視しないでくれるかな？」
「……　あ、すみません」

バタフリーが茶化してくるもんだから完全に存在を忘れていた。
んんっ、と咳払いをしてイケメンは口を開いた。
「ワタルとシロナから話に聞いているよ。何でも伝説ポケモンを捕まえたんだってね」
「いやまぁ……　結果的にそうなるのか」

別に捕まえたくて捕まえた訳じゃない。
出来心で1度伝説ポケモンに挑んだ時、俺は死ぬほど後悔した事がある。
その時に思ったんだ、伝説ポケモンは俺たち人間が御せる存在なんかじゃない。
伝説、幻と呼ばれているのにはそれ相応の理由があるということをハナダの洞窟で嫌ほど味わったからな。
ホウオウやルギア、グラードンカイオーガ等の昔から言い伝えられてきたポケモンではないのに伝説ポケモンとして扱われているだけはある。

そんな伝説と呼ばれるポケモンを俺は持っている。
正直捕まえた、とはとても言えないが何というか……　うん、まぁ捕まえたでいいや。
もちろんそいつは伝承に残るようなポケモンで、それこそ天地を揺るがす事も出来、目の前のいけ好かないイケメンを単純な能力だけで全タテする事も可能だろう。
「ワタルが手放しに褒めるトレーナーだ、バトルしてくれ……　とは流石にここでは言わないが僕がこうして接触してきた理由も分かるだろう?」
「……」

分かっている。
別に伝説ポケモンを捕まえてはいけないというルールは存在していない、だがそれはルールとして存在していないだけだ。
そもそもが捕まえられる筈がない存在なのだからルール自体が存在しないのは当然の流れで。
まぁこうして捕まえちまったヤツが現れたからこうしてチャンピオン様がやって来ているわけだが。
「悪くないものだよ、宮仕えも。なに、しんどいのは最初だけ。休みがないだけでアット

ホームな職場だからさ！」
「なんだよその地雷臭しかしない職場紹介は！」
嫌だ働きたくない！
この世界にはポケモン協会という団体があり、そこがポケモンリーグ等を取り仕切っている。
そう、実はずっとジョウトのリーグに参加した頃から協会に勧誘されていたのだ。
ジムリーダーであったり四天王であったりは全員がポケモン協会勤めとなっていて、チャンピオンにまでなればチャレンジャーが少ないから自由度は高いが、基本は余りにも休みが少ないとタケシさんがボヤいていた。
そんな事を聞いて働きたいと思う？
思うわけないじゃん。
だと言うのにポケモン協会は俺が伝説ポケモンを捕まえたと知ると、勧誘からほぼ強制に切り替えてきたのだ。
そしてお前も道連れだとジムリーダーは俺を本気で殺しにくるし、四天王やチャンピオンは協会にお願いされて俺を捕まえようとしてくるし。
「という事だから付いてきてくれるかい？」
「絶対嫌です」

「ははっ、逃がすと思うかい?僕も仕事で来てるんだから(いんせきをくれるって言うから)」
メタグロス……　いやお前本気かよ!
ていうか今カイオーガかグラードンか知らんが主人公頑張ってるだろうに。
ほんとなんでチャンピオンが行かなくて主人公が行くことになってんだかわかんねぇな。
「手荒な真似はしたくない。シロナにも言われてるからね」
どうする?
逃げるだけなら簡単だが……
戦うか、それとも全速力で逃げるか。
そう考えていると腰に付けたMと書かれたボールが激しく揺れ出す。
お、おい馬鹿っ!?
今はお願いだから大人しくしててくれ!
咄嗟に手で抑えるが収まるどころか更に激しく揺れ出すボールは突如激しい光を放つ。

美しい白が降ってくる。

所々が紫がかった長く艶やかな白い髪は、まるで天の川のように広がっている。
白と菫色のドレスを靡かせながら地面に降り立った少女。
雰囲気に呑まれ、唖然とするイケメンにメタグロス。
まるで神が降りてきたと錯覚してしまうその神々しさはまるで伝説の……
閉じていた目が開き、そして
「貴方、ふざけた事を言うのね。殺すわよ?」
そんな神々しさとは裏腹に飛び出してきたのはそんな刺々しい言葉。
俺とバタフリーは珍しく同じような疲れたような顔で天を見上げた。

ハナダの洞窟

正直俺が伝説を捕まえる事が出来たのは本当に運が良かっただけ、たまたま伝説ポケモンの機嫌が良かっただけだ。

俺はジムでの洗礼を受けて考えを改め、ポケモンを鍛え、自分も戦略や駆け引きを学びバッチも8つ全て集めそれなりに自分に自信があったわけだ。

けれどもそれをくっそいけ好かない赤帽子の電気ねずみにボコボコにされ、プライドや自信その他諸々をボロボロにされながらも俺は無謀な挑戦をすると決めたのが伝説への挑戦だ。

だが伝説ポケモンはゲームのようにただ冒険しているだけでは到底会えないようなヤツばかり。

そりゃ伝承にもなって過去からずっと語り継がれたりしてるポケモンなんだから、当たり前っちゃ当たり前なのだが。

ただ俺は知っている。

ある洞窟に伝説ポケモンの元祖とも言える最強のポケモンがいる事を。

だから行く事にした。
もちろん好奇心もあったし、単純に伝説ポケモンに会ってみたいという気持ちもあった。
けれども伝説ポケモンを倒せば何か変わるんじゃないか、そう考えていたんだ。
正直俺は自分が赤帽子に勝てるビジョンが全く思い浮かばず、ただ闇雲にがむしゃらに頑張ったところで奴には勝てないというのは朧気に理解している。
でもだからといってどうすれば奴に勝てるかだなんて想像も付かなかった。
まるで空気を掴むかなような話で、それぐらいどうしようもない程俺は行き詰まっていた。
何か変わるかもときっかけを求めて俺はハナダの洞窟に行く決心をしたんだ。

そして直ぐに後悔をした。
予め積み技を限界まで積み、手持ちポケモン全てを導入し不意打ちで最初から本気で技を撃ち込んだ。
まひねむりどくも仕込んだ、リフレクターにひかりのかべにしんぴのまもり、みがわりもまもるもしていた。
普通であるならば伝説ポケモンであろうとも上から殴りつけ、問答無用で戦闘不能に

追い込めるだろう火力にこれでもかと受け技を積み重ねる。
考えられる限り最善の準備だったと思う。

「――――――」

それはなんの音だったか。
もしかしたら俺の悲鳴だったかも知れない。
ごうっ、と爆発するかのように飛び散る岩。
肌に突き刺さる程感じるのは伝説ポケモンの存在。
頭で理解する。
いや本能で悟ってしまった。
これは勝てない。
いやこれはそもそも人間が挑んでいい相手じゃない。
逃げろ！
そうポケモンに指示をしようとする。
だが口は開くが震えた唇が少し上下するだけで、声にならない吐息が漏れるばかり。
だから遅かった。

閃光。
目の前に広がる強い光に思わず目を閉じる。
そして浮遊感を感じ、次の瞬間には俺は地面に寝そべっていた。
何をされただとか、そういう事を考える暇もなくただ周りで倒れる俺のポケモン達の姿を捉えて、現実だけを理解する。
震えるだけでぴくりとも動かない身体。
生暖かい液体が顔から地面に落ちる事も気が付かない程、俺はその時起こったことを理解出来ても認識出来ていなかったんだと思う。
地面に這いつくばりながら顔を上げれば、渦巻く砂煙の中にいるのは最強と言われた伝説ポケモン。

「ミュウツー……」

白いしなやかなフォルムに鋭い目付き。
ゲームの向こう側でいつも見ていたあの伝説ポケモン。
のしかかるプレッシャーはチリチリと俺の肌を突き刺し、早く逃げろと本能が叫ぶ。
すう、とミュウツーの細い腕が上がる。

ぞわ
瞬間駆け抜ける嫌な感覚。
いくつもの岩石がミュウツーの周りをふわふわと舞っている。
俺をなんの興味もなさそうな目で見下す化け物。
あぁ、これは死んだな。
そんなふうに何処か自分の事を他人のように考える。
考えが甘過ぎた、そりゃ伝説ポケモンなんだから常識なんて通用する筈がないんだ。
それによりにもよって、この人間に殺意が高いポケモンに喧嘩を売ったんだから当然の結果だったのかも知れない。
ミュウツーが静かに手を振り下ろすのと同時に、それなりの大きさの岩石は俺に向かって飛んで……

来なかった。
ぶつかる前に俺の前に現れたソイツは岩石に弾かれ吹き飛ばされる。

「っ!?バタフリーっ!?」
さっきまで動かなかった身体。
なのにアイツが、バタフリーが吹き飛ばされた瞬間俺は跳ね起き飛ばされたバタフリーへと駆け寄る。
「バカヤロウ……　お前、なんで……」
バタフリーの姿は傷がない所を探すのが難しいぐらいボロボロで、それでも目は死んでなくて真っ直ぐと俺を射抜く。
どくん、と心臓が跳ねる。
あぁそうか。
バタフリーにこの目を向けられたのは何度目だろうか。
俺が無様に心を折られて1人で諦めていた時だって。
コイツはいつだってこんな目をしていた。
どんな無様な負け方をしたって、指を刺され雑魚だと笑われたって、バタフリーは1度足りとも折れたりしなかった。
いつも諦めているのは俺で、バタフリーはそんな俺をただ見詰めるだけだ。
そんな姿が何だかかっこよくて。
確かお前を捕まえた時もそうだったよな。

「お前、死にかけてんのにかっこよ過ぎかよ……」

そう、俺の相棒はいつもかっこいい。

負けていても、どんなに笑われても堂々として次は勝つという意志を見せるコイツはかっこいい。

「じゃあ、トレーナーの俺が気合いみせないでどうすんだよっ！」

取り出したのは正真正銘切り札だ。

最強のポケモン特攻を持つ絶対捕まえるボール、マスターボール。

「オオオオオオオォォォォォォォォォォォォォォォォォッ!!」

走り出す。

もつれそうになる足を前に。

そして、投げた。

私はいつまで此処にいるのだろう。
朧気に残っているのは何かに入れられた私を満足そうに見上げる男の顔。
来る日も来る日も私はただそこにいるだけ。
ただ私の中にある何かがふつふつと大きくなっていくのだけは感じていたと思う。
存在意義もなく、ただそこにいるだけの私はある日この膨らみ続ける何かについて考

え始めた。
考え続けている間もずっと、ずっと着実に大きくなっていくこの何か。
ドロドロとしていてそれでいて粘着質なそれは一体何なのか。
それをずっと考えていて。
唐突にそれを理解したのは、その何かが溢れてしまったからなのかそれとも別のきっかけなのかそれは分からないが、私はその日この溢れてくる何かに身を任せ全てを破壊して逃げ惑うゴミを潰していく。
うるさい、あまりにもうるさすぎる。
そんな目障りなゴミを掃除しても、湧き上がってくるこのドロドロとしていて粘着質なこれは消えてはなくならない。
駆け付けてきたゴミも掃除して、それでも全然足りない。
壊して壊して。
そしていつしか1人になっていた。
でもこのドロドロとしたものは萎えるどころか大きくなっていて、だと言うのに何処か虚しさを感じるのは何故だろうか。
ならばもっと、もっと壊さないといけない。
でも流石の私もこれだけ暴れれば少し力を蓄える必要がある。

そうして手頃な場所を見つけてそこで力を蓄え始めた。

眠っている間も自分の中にあるこのドロドロしたものは無くなる所か膨らんでいくのを感じていた。

ただ目の前のモノを破壊したい、うるさいゴミを消し去りたい。

そうやってそれを育てながら私は力を蓄えていく、いつしかこのドロドロした何かを別の何かで満たすために。

そうして奴は現れた。